

4・5 歳齡保育園児における笑顔の識別と向社会性

細見 麻衣

【目的】 向社会的行動とは、コストの有無や動機にかかわらず、他者に利益をもたらす自発的な行動である。人は笑顔を表出する他者に対してポジティブな印象を抱くことが多く、笑顔は、他者の向社会性を評価する手がかりとして利用されることがある。Song et al. (2016) の研究から、4・5 歳児は、笑顔を表出する人のほうが、作り笑いを表出する人に比べて自分に対して向社会的にふるまってくれると期待することが示されている。しかし、笑顔と向社会性の関連について、発達的な研究はほとんど行われておらず、どのような特徴を持つ児が笑顔と向社会性の関連を見出しているのかについては明らかにされていない。本研究では、まず、4・5 歳齡児において、大人の笑顔と作り笑いを区別することができるか、また笑顔と向社会性を関連付けることができるかを調べた。そして、児の笑顔の識別能力が、笑顔を使用する児の傾向や児自身の向社会的行動と関連しているかを検討した。

【方法】 A 認定こども園の 4・5 歳齡児クラスに所属する 27 名（男児 17 名、女児 10 名）を対象とした。児が大人の笑顔と作り笑いを区別しているか、笑顔と向社会性を関連付けているかどうかを検討するため、笑顔識別課題を行った。笑顔識別課題では、大人の笑顔と作り笑いの写真を提示し、児に「どちらの人のほうが好きかな」「どちらの人のほうがシールを分けてくれそうかな」「どちらの人にチョコレートを分けてあげたいかな」という 3 つの質問をした。また、自由遊び場面において、個体追跡サンプリング法を用いて観察を行い（範囲：7 分 48 秒-10 分 0 秒）、児の向社会的行動、笑顔を表出する時間、笑顔を用いた文脈、他児との接触を記録した。

【結果と考察】 笑顔識別課題において、「どちらの人のほうが好きかな」と尋ねた質問では、笑顔の写真を選んだ人数と作り笑いの写真を選んだ人数に有意な差はみられなかった。「どちらの人のほうがシールを分けてくれそうかな」と尋ねた質問では、笑顔の写真を選んだ人数が多い傾向にあった。「どちらの人にチョコレートを分けてあげたいかな」と尋ねた質問では、笑顔の写真を選んだ人数が有意に多かった。笑顔識別課題の結果を用いて、2 つの方法で児を識別可群と識別不可群に分類した。1 つ目の方法では、Song et al. (2016) の研究に従い、「どちらの人の方がシールを分けてくれそうかな」という質問で笑顔の写真を選んだ児を識別可群とし、2 つ目の方法では、3 つの質問すべてにおいて笑顔の写真を選んだ児を識別可群とした。そして、識別の可否が、自由遊び場面での向社会的行動や児が示す笑顔と関連しているか検討した。結果、どちらの分類の方法においても、児が笑顔を表出する時間や笑顔を使用する文脈、児の向社会的行動には、笑顔の識別の可否によって違いがあるとは言えなかった。さらに、3 つの課題における児の笑顔の識別成績を点数化して合計し、その合計得点（0-6 点）が児の行動と関連しているかを検討した。しかし、笑顔の識別成績と、向社会性や笑顔に関する児の行動に関連があるとは言えなかった。

本研究結果から、4・5 歳児は笑顔と作り笑いを区別できており、笑顔を表出する大人の向社会性を高く評価していたことが分かった。さらに、4・5 歳児は、作り笑いを表出する大人よりも笑顔を表出する大人に向社会性を示す傾向があることが示された。また、識別の可否が、児自身の向社会性や笑顔の使用と関連しているとは言えなかったことから、他者の笑顔から向社会性を評価する能力と、児の向社会性や笑顔を使用する能力は異なるプロセスで発達していくことが示唆された。（比較発達心理学）